

序 文

第5回日本Neurogastroenterology(神経消化器病)学会を、2006年10月10日(火)に札幌市のきょうさいサロンで開催した。第1回 佐藤信紘教授(横浜)、第2回 本郷道夫教授(大阪)、第3回 藤山佳秀教授(大阪)、第4回 藤本一眞教授(佐賀)に引き続く運営である。本会に際し、佐藤信紘理事長と神経消化器病学会事務局に多くのご協力をいただいた。また、教室の金澤素博士、渡部まちこ秘書をはじめとする諸君に初期から苦勞をかけ、企業の各社から共催、広告、寄附により、財政基盤を援助いただいた。参加くださった各位とあわせて深く御礼申し上げます。

今回は、第48回日本消化器病学会大会および第14回日本消化器関連学会週間(DDW-Japan 2006)の前日に行った。イブニングセミナーは、長年付き合いがある機能性消化管障害(FGID)の診断基準RomeⅢの産みの親、アメリカのDouglas A. Drossman教授を招聘して特別講演をお願いした。この領域に関心がある医師・研究者に、日本消化器病学会に参加すると同時に、気楽に参加していただき、世界の神経消化器病の潮流に触れてもらいたいという意図でこのようにしたものである。当日はDrossman教授の講演に向けて多数の熱心な聴衆が集まって盛会となり、当方としても欣快であった。

ランチョンセミナーでは、本学会副理事長で日本国際消化管運動研究会の代表幹事もされている同じ東北大学の本郷道夫教授にRomeⅢの和文での解釈をお願いした。症状の表現と言語の問題は本来非常に重要であり、さらなる検討が必要であると締めくくられた。また、「脳-腸相関と過敏性腸症候群」と題して会長講演を行った。科学的には脳-腸相関がきわめて重要であると確信する。また臨床的にも、神経消化器病の考えがもっと普及し、治療の科学水準が向上すれば、消化器疾患の多くを占めるFGIDの患者への福音となる。神経消化器病をもっと活性

化し、日本の社会で重視されるようにしなければならないであろう。

今回は一般演題15と例年通りの演題が集まり、15演題いずれも甲乙つけがたい高水準の発表がなされた。本学会では、前回から学会役員の投票による学会賞を選定している。第5回学会最優秀演題賞は東北大学医学部附属病院心療内科 相模泰宏博士の演題「機能性便秘における睡眠状態と成長ホルモン、自律神経機能、消化管機能の関連の検討」が選ばれた。一方、奨励賞には藤田保健衛生大学坂文種報徳曾病院神経内科(心療内科) 金子宏教授による「過敏性腸症候群における直腸拡張刺激、精神的ストレスの認知および脳血流に及ぼす影響」、京都薬科大学薬物治療学 栗飯原永太郎修士による「カプサイシン誘起胃アルカリ分泌の作用機序」、東北大学医学系研究科行動医学分野 渡辺諭史博士の「内臓感覚の催眠変容過程におけるFunctional Connectivityの検証」の3演題が選出された。質疑応答の水準も高く、真剣かつユーモアがあり、ひと言で言っただけの面白い応酬がなされた。

学会の生命は演者の学問への情熱と聴衆の新知見への驚き、好奇心にある。日本のNeurogastroenterologyを、学術水準が高いうえに新知見に満ちた興奮領域に育て上げるには、本領域に関心をもつ国内外の臨床医・研究者との連携と共同作業が今後重要になる。第6回日本Neurogastroenterology(神経消化器病)学会は、兵庫医科大学内科学上部消化管科 三輪洋人教授により、2007年11月3日(土)に大阪市の梅田スカイビルで開催される(詳細は<http://neurog.umin.jp/>を参照)。Neurogastroenterologyが今後の発展・注目領域であることは間違いのない社会情勢である。多数の臨床医・研究者の参加、参入を期待する。

東北大学大学院医学系研究科行動医学教授 福土 審